竹内浩三全集—1

骨のうたう

小林 察 編

新評論

竹内浩三全集—1

骨のうたう

小林 察 編

新評論

編者紹介

小林　察（こばやし・さとる）

1932年，三重県度会郡玉城町生まれ。宇治山田高校から東京大学文学部へ進学，同独逸文学科卒業。光文社出版局編集長を経て，現在，玉川大学文学部教授。最近の訳書に，ドイツの非行問題を告発した『かなしみのクリスチアーネ』，『アンディ』（共に読売新聞社刊）がある。1983年，同郷の親友西川勉の遺稿追悼文集『戦死やあわれ』（新評論）を編集。

現住所　東京都狛江市元和泉２-27-12

竹内浩三全集１　骨のうたう　（検印廃止）

1984年７月25日　初版第１刷発行
1984年８月30日　初版第３刷発行

著　者　竹内浩三
発行者　二瓶一郎

発行所　株式会社　新評論

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28
電話 東京（202）7391 番
振替 東京 6～113487 番

定価はカバーに表示してあります
落丁・乱丁はお取替えします

印刷　新栄堂
製本　河上製本

©松島弘，小林察　1984

0095—950010—3177
Printed in Japan

編者まえがき

「竹内浩三って、どんな詩人ですか」と、編集長の藤原良雄さんに訊かれたとき、私は返答に窮した。「たとえば、恋愛詩人とか放浪詩人とか反戦詩人とかのように一言で表現すれば」と助け舟を出されても、まったく言葉が浮かんでこない。あげくのはてに、私は「素人詩人ですね」と答えてしまった。彼は、呆れ顔になって、話題を変えた。

今もって、ぼくは竹内浩三を何詩人と呼ぶべきか分からない。「天性の詩人」とか「生まれながらの詩人」と呼んでいいなら、ぼくはまっ先に賛成する。しかし、それではキャッチフレーズとして視覚的に弱いのだそうだ。たとえば、天才詩人とか夭折詩人でもよさそうなものだが、それは石川啄木や立原道造のイメージであって、竹内にはぴったりこない。彼の純朴にして野太い陽性な特質が消されてしまうからである。

竹内浩三は、何よりもまず天真爛漫な一個の魂であった。そして、人の魂がひたすらに天真のまま生きることを求めつづけるとき、人が詩人にならざるをえないということがあるとすれば、竹内こそそのようにして詩人となった好例ではないかと思う。

竹内浩三の天稟の才能は、最初、数学とマンガにおいて顕われた。数学の中でも、とくに幾何学は天才的であった。現在日本数学教育学会名誉会長の地位にある井上義夫氏の証言だから、まちがいはない。氏は、昭和十年、大学を卒業と同時に宇治山田中学校の数学教師として赴任、たまたま二年生の竹内のクラス担任となった。ところが、彼の数学ノート

は、いつのまにやらマンガでいっぱいになっていった。井上先生は、授業中マンガを描いてまったく悪びれるところのない竹内の学習態度に、不思議と叱る気が湧かなかったという。そして、「自分の半世紀にわたる教歴の間に、竹内君のような生徒は他にいない。彼は、神のような無邪気さにあふれていた。善意のかたまりのような子だった」と回想する。

竹内浩三は、幼いころ母と死別し、けっして家庭的な幸せに恵まれていたとはいえない。それでも、いや、それだからこそ、彼は早くから人の世を喜劇として見る目を身につけていた。教室でも、電車の中でも、いきなり「おもろい！」と叫んで笑い出す癖があった。初めは何がおもしろいのか分らない友人たちも、考えてみるとたしかにおもしろいので、一緒になって爆笑した。「世界は、考える者にとって喜劇である」というシェイクスピアの金言に従えば、竹内は「考える人」であるが、それが彼には幾何の解答と同じように瞬時の閃きによって把握できたのである。非凡な直観力の持主にのみ、ありうることなのだろう。しかし、当時の世の中はユーモアのわからぬ朴念仁どもであふれ、竹内のような人間は時勢に合わない変人とされた。たしかに、彼の振舞いは普通人から見ると奇妙なことが多かった。たとえば軍事教練のとき、帽子をあみだにかぶってにたりと笑っては、教官にびんたを喰らった。彼は、どうして殴られるのかも分からず、またにたりと笑い返して殴られた。しかし、彼はけっして演技をしたのではない。こんな振舞いも、大真面目な自然の流露だった。

中学三年（昭和十一年）の夏、竹内の手で「まんがのよろずや」という回覧雑誌が作られた。彼の創作意欲が、阪本楠彦（農業経済学者、東大名誉教授）や中井利亮（最初の竹内浩三作品集『愚の旗』の編者、参宮タクシー会長）など同級の共鳴者と一緒に、突然炎のように吹き上げたらしい。その巻頭に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「子供はマンガをよろこぶ。マンガをよろこばない人は子供の心を失ったあわれな人だ。大人になってもマンガをよろこぶようでありたいものだ。」と、自信に満ちた宣言をしている。月刊であることを予告しながら、もう翌週には、彼一人で臨時増刊号を出すという熱の入れ方だ。

しかし、その時すでに、竹内は己れの生命と魂を破壊しようとする怪物と出会っていた。急速に世界戦争へと突っ走って行く時代の流れそのものである。この怪物は、少年たちのマンガの中に潜む小さな反抗心さえ見逃さなかった。十月号の「血書志願」という竹内のコラムが教官の目にとまり、ただちに発行停止を申しわたされた。父親からも叱られた。しかし、彼はすぐに新しい雑誌作りにとりかかり、それに「説教」という風刺詩をのせて回覧に供した。「四面軍歌」と題する絵も入れた。たちまち教官に呼び出されて、こんどは体操教師の家へ身柄預りとなった。

竹内は、宇治山田中学卒業後、一年間浪人をしてから己れの志す映画の道へと進んでいった。昭和十五年、映画志望に反対であった父親が死亡し、ようやく日本大学専門部（現在の芸術学部）映画科へ入学できたのである。上京した竹内は、さながら水を得た魚のように自由奔放に生きようとした。しかし、例の怪物は、ますます露骨に牙をむき出してきた。本来、映画は、彼の直観力を生かすに最もふさわしい道であった。そのうえ、共同作業を必要とする映画の仕事は、にぎやかなことの好きな竹内の性分にぴったりであった。しかし、当時の国策に沿った映画界の主流は、彼の繊細な神経に耐えられるものではなかった。わずかに伊丹万作の知遇をえて、映画に希望をつなぐことができた。

竹内浩三は、こうしておのずと詩や小説を書くことに全力を投入するようになった。何よりも迫りくる徴兵の時までに己れの生の証（あかし）を遺すには、もはや手あたりしだいの紙片に

物を書く以外手がなかった。

竹内は、今や戦争という怪物の正体を凝視し、その圧倒的な暴力とぎりぎりせめぎ合いながら、詩人となっていった。それには、不屈の決意が必要であった。「以伎芸天為我妻」、とか「生活即詩、詩即生活」といった彼の座右銘は、ぼくには「生きることと書くことの一致」を決意したフランツ・カフカを思い出させる。

その決意は、竹内浩三を幾度も襲っている。上京以来せっせと飽むことなく姉松島弘(こう)さんに書き送った手紙類も、その決意の継続をうかがわせるが、それが真に強いものとなったのは、昭和十七年六月から、中部第三十八部隊に入隊した十月まで毎月出しつづけたガリ版刷りの「伊勢文学」である。そして、一兵卒となってからも、その不屈の戦い――戦争という怪物とのペンによる戦いはつづく。一方では「筑波日記」(第二巻所収)のような稀有な観察記録を残しながら、他方ではその醜悪な現実を断ち切るようにして空想的な物語が軍隊用箋につづられていく。そして、戦争は、この人間らしい最も人間らしい魂を、ついにフィリピンの戦場へとなみし去り、この魂が予感したとおり、人間竹内浩三の生命を断った。享年、二十三歳。

竹内浩三が戦死してから、ちょうど四十年目を迎える。この間竹内の遺稿を大切に保存してこられた唯一人の肉親である松島こうさん、没後十年目に私家版遺稿集をまとめられた中井利亮氏、そして竹内浩三を取材中亡くなられたNHKディレクターで畏友の西川勉君のおかげで、本書が世に出ることになったことをここに銘記しておきたい。なお、「若い人たちに読んでほしいから」という編集部の要望に従い、表記はすべて現代仮名使いに改めた。

一九八四年五月三日

小林察

もくじ

編者まえがき　小林　察　1

一　詩　11

骨のうたう　13

兵士の歌　17

ぼくもいくさに征くのだけれど　演習一　演習二
行軍一　行軍二　望郷　射撃について　夜通し
風がふいていた　南からの種子　白い雲

青春の歌　37

三ツ星さん　金がきたら　涙も出ずに　五月のよ
うに　大正文化概論　冬に死す　麦　町角の飯
屋で　空をかける　あきらめろと云うが　雨
鈍走記　トスカニニのエロイカ　チャイコフスキイ
のトリオ　メンデルスゾーンのヴァイオリンコンチェ
ルト　モオツアルトのシンホニイ四〇番　北海
に　海　こん畜生　口業（こうごう）　色のない旗　愚の
旗　手紙　泥葬　兵営の桜　雲　うたうたい
は

二　小　説　91

雷と火事　93

ふられ譚　97
高円寺風景　99
作品7番　109
吹上町びっくり世古　113
天気のいい日に　122
私の景色　125
勲章　131
伝説の伝説　137
ソナタの形式による落語　140
花火　147
ハガキ小説二編　152

三

シナリオ　155
雨にもまけず　157
あるシナリオのためのメモ　168

四

随筆　173
私ノキライナモノ　175
私ノスキナモノ　178
服装論　女の服装　182
星について　185
映画について　金について　女について　酒について　戦争について　生活について　星について

長い手紙　187
まえがき　1文について　2季節について　3放浪記　4絵について　5又、季節について　6下駄について　7トオキョオの子供　8服装について　9カンニングについて　10又、カンニングについて
ずいひつ　193
文房具について　女優について　くいしんぼうについて　父と映画について　母と映画について　四書五経について　母と文学について　父の天文学について　シガレットケースについて　女のアトをつけること
漫画批評　201
『漫画』五月号について
ことばについて　204
1試験　2ぜいたく　3リョウカンさん　4アンミツ　5だるま屋　6ことば　7方言学
浩三記　207
芸術についての手紙　209
解題　小林察　211
竹内浩三・略年譜　232

装　幀・薬師神親彦
カット・竹内浩三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹内浩三全集1

骨のうたう

一

詩

骨のうたう

戦死やあわれ
兵隊の死ぬるや　あわれ
遠い他国で　ひょんと死ぬるや
だまって　だれもいないところで
ひょんと死ぬるや
ふるさとの風や
こいびとの眼や
ひょんと消ゆるや
国のため

大君のため
死んでしまうや
その心や

白い箱にて　故国をながめる
音もなく　なんにもなく
帰っては　きましたけれど
故国の人のよそよそしさや
自分の事務や女のみだしなみが大切で
骨は骨　骨を愛する人もなし
骨は骨として　勲章をもらい
高く崇められ　ほまれは高し
なれど　骨はききたかった
絶大な愛情のひびきをききたかった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com